平成２８年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

今村宏之

１．事業実施の目的
博士論文執筆のための予備調査と、調査対象からの調査許可取得、カウンターパート候補との面会
２．実施場所
① インドネシア共和国ジャカルタ首都特別州
② インドネシア共和国ジョグジャカルタ特別州
３．実施期日
平成 29 年 2 月 25 日（土）から 3 月 15 日（水）
４．成果報告
●事業の概要
申請者は、博士論文執筆のための予備調査および、調査対象からの調査許可の取得、カウンターパート候補との面会を実施するため、インドネシア共和国のジャカルタ首都特別州とジョグジャカルタ特別州の関係機関を訪問した。ジャカルタには 2 月 25～3 月 4 日の 8 日間、ジョグジャカルタには 2 月 26,27 日と 3 月 4～14 日の 12 日間滞在した。合計の滞在日数は 18 日間である。

●ジャカルタ首都特別州にて
①インドネシア国立図書館にて
ジャカルタでは、第一に、国立図書館に毎日通い、プンチャック・シラットに関わる文献収集を実施した。申請者がインドネシア国立図書館を訪問したのは、今回がはじめてであった。当初の目的であった、インドネシア・プンチャック・シラット協会（以下、シラット協会）初代会長ウォンソヌゴロ氏が 1960 年代に、第 1 回インドネシア国民体育大会の資料に寄稿した「プンチャック・シラットの将来」というタイトルのエッセイは、初日に入手することができた。現地の図書館員の方々とコミュニケーションをとるうちに、国立図書館 7 階の希少雑誌コーナーには、インドネシア独立前後に出版された大衆雑誌が大量に収蔵されていることを知った。雑誌記事は図書館が用意する WebOPAC で検索可能であることもわかった。実際に検索してみると、既存のプンチャック・シラット研究ではほぼ触れられることのなかった、大量の雑誌記事があることがわかった。
ジャカルタの国立図書館には、各階ごとにフォトコピーコーナーがある。一方で、すべての蔵書が書庫に収められており、請求番号を伝えて図書館員の方に図書を取ってきてもらう仕組みになっているため、書棚から自由に閲覧して調べる、というようなことが難しい。一方で、図書館員の方々と会話をするうちに、「必ずしも OPAC には記載されていない雑誌

記事もある。図書館員が見かけた覚えがあれば、教えてもらえることがある」という。

シラット協会がプンチャック・シラットの語を設定したのが 1949 年とされる。既存のプンチャック・シラット研究では、プンチャック・シラットという用語の成り立ちをシラット協会の見解ないし、フィールド先の実践者らの見解に依存して解説を試みてきた。今回の収集では、文献の内容を精査しつつ収集したため、わずかに 6 つの文献と、4 つの雑誌記事が集まっただけである。しかし、滞在中に収集できた 1920~1950 年代の 4 つの雑誌記事では、シラット協会とも実践者とも必ずしも一致しない見解が記述されていることに気づいた。たとえば、1929 年には、トゥリス・スタン・サティ（Toelis Setan Sati）というインドネシア文学黎明期の作家が解説するところによると、スマトラ島では、藝能的な意味合いのものをプンチャックと呼び、その芸能的なものの中に宿る護身術・殺人術の要素をシラットと呼んでいた。既存の研究では、プンチャック・シラットの原型となった護身術は、ジャワではプンチャックと呼ばれ、スマトラではシラット（シレッ）と呼ばれていた、という説明がなされてきた。この作家の見解の正否を確かめるすべはない。しかしながら、申請者は、このような見解のずれは、独立前後の国民文化形成のために、インドネシアにおいてプンチャック・シラットの語を構成するプンチャックとシラットの意味合いが変容していった可能性があるのではないか、と考える。本質的な部分についてはわからないが、少なからず、表象の次元でなにかしらの変容があったものと思われる。

この点については、今後、継続して調査を実施するための計画を立案中である。

②カンダン・ゴリラにて

カンダン・ゴリラは、日本語にすれば「ゴリラの檻」という意味である。これは、ジャカルタのエスニック集団であるブタティ人の伝統文化復興を目的として形成された、有志団体である。より厳密にいえば、弁護士を生業とし、ブタウィの文化について造詣の深いグスティ（仮名）という人物が、祖父から受け継いだシラットを近隣に住む子供たちに伝授するとともに、国家や政治に関する若干の思想教育を目的としてつくられた団体である。

グスティ氏は、幼少から祖父にシラットを教えられて育った。若い頃から格闘技に興味をもち、日本のものも含む様々な術を学ぶために、家を留守にすることが多かった。2009 年ころに祖父が亡くなると、自宅周辺で祖父はモスクの整備をする名士と捉えられていたことに気づいた。自宅に腰を落ち着けるようになると、彼の住む都市集落の隣近所で、麻薬・酒・犯罪が横行していることに気がついた。そこで、自宅の客間をお手製の稽古場兼私設図書館に改装し、子どもたちや若者に、グスティ氏が学んできたシラットや教養を教えることにした。グスティ氏がいうには、気がついたら、カンダン・ゴリラという名称でこの一連の活動や施設を呼称していたという。

申請者は、2013 年から交流のあるグスティ氏のもとを訪問し、活動内容について聞き取りをした。また、当日夜には、実際に子どもたちがグスティ氏の家で実施する稽古を見学した。19:00 過ぎには、自宅の稽古場で 5~10 歳くらいの、男女混成の子どもたち約 10 人を

相手に型稽古を実施した。22:00 過ぎには、自宅からモーターバイクで 3 分ほどの場所にあるモスクで、中高生ほどの年齢の男子に 1 時間ほど稽古をつけた。その後、男子らが、胡坐の上に乗せたドラムで伴奏をつけ、兄弟子にあたる人物の演舞が実施された。最後は、兄弟子や男子らとともに、グスティ氏の説法を聞いた。

申請者が改めてカンダン・ゴリラを訪問したのは、カンダン・ゴリラという組織についての情報を得るためであった。これを実施することにしたのは、これから先、調査対象となる、ジョグジャカルタのタントゥンガン・プロジェクトという団体の活動を考えるうえで、比較対象をいくつかもっておくべきと考えたからである。実際、カンダン・ゴリラを訪問したことで、以下の点が明らかになった。カンダン・ゴリラでは、エスニック・アイデンティティの表明としてシラットを利用することが優先されていた。一方で、タントゥンガン・プロジェクトでは、特定のエスニック・アイデンティティに連なる発言はあまりされな。国民文化として規定され、振興されてきたプンチャック・シラットの枠組みをそのまま鵜呑みにするでもない。むしろ、共和国政府の国民文化や地域文化の枠組みで政治的に利用されてきたプンチャック・シラットという概念そのものを再構成しようとしているように見える。

③教育文化省訪問

今回の予備調査では、旧友の紹介で、インドネシア教育文化省を訪問し、教育文化省専属の研究者らとプンチャック・シラットについて、約 1 時間、議論する機会を得ることができた。ここでは、旧友を含めて、3 名の研究者と交流を深めた。議論の内容は、2017 年 5 月にパリの UNESCO 本部で実施される、プンチャック・シラットの UNESCO 無形文化遺産登録のための演舞についてであった。教育文化省の研究者が、この登録に際して、申請団体の支援や助言を実施してきた、ということだった。ここで明らかになったのは、教育文化省の研究者は、プンチャック・シラットにまつわる申請者ら（実践者ら）の言説を証明することよりも、書類上の不備がないように助言する方針をとっていた、ということであった。少なからず、教育文化省の研究者は、プンチャック・シラットの実践者らの言説を鵜呑みにしたわけではない、ということがわかった。

文化資源化のため、インドネシアとマレーシアがプンチャック・シラットの UNESCO の無形文化遺産登録をめざしている。ネット上の記事や、インドネシア各地で催されるプンチャック・シラットのイベントに登場する政府関係者による発言では、「プンチャック・シラットはインドネシアのものであり、他の国に盗まれてはいけない」というものがよく見られる。文化の資源化をめぐるいさかいの火種となっているのである。本研究では、UNESCO 申請をした集団を研究対象とするわけではない。しかしながら、UNESCO に関する情報もこれから研究の視野に入れる必要があることを認識させられた。

④インドネシア・プンチャック・シラット協会への訪問

当初、シラット協会の本部や、併設されている図書館の訪問も視野に入れていた。しかし

ながら、シラット協会に精通したインフォーマントを見つけることができなかったため、今回は断念した。

●ジョグジャカルタ特別州にて

①タントゥンガン・プロジェクト

今回の滞在において、もっとも重要な目的は、タントゥンガン・プロジェクト（Tangtungan Project 以下、タントゥンガン）から調査の許可を得ることであった。申請者は、これに引き続いて、タントゥンガン・プロジェクトの活動や組織構造などについて、情報を得ることにしていた。申請者は、タントゥンガンとは 2012 年から交流がある。彼らが主催するイベントに演者として出たり、イベントの手伝いなどをしたりしてきた。しかしながら、当時は、タントゥンガンの中枢人物に「調べるのはかまわないが、我々の活動の邪魔になることはしないでほしい」と釘を刺されており、距離を測りきれなかった。結局、当時は調査対象になってもらうことはなかった。

博士課程進学後、研究内容の変更に伴い、プンチャック・シラットに関する文献研究を続けるうちに、タントゥンガンの言説が、シラット協会とも、エスニック・アイデンティティ表明を優先するシラット実践者とも何か異なることに気づいた。その違和感は、タントゥンガンの言説には、その背景に、草の根でグローバリゼーションに対抗していこうとする意志が見られることであった。タントゥンガンに関係があるひとびとは、海外からインドネシアに入って来た護身術やスポーツと比較して、プンチャック・シラットの窮状を訴えることが多い。また、いつか海外にプンチャック・シラットを奪われてしまうのではないか、という危機感を述べることも多い。「プンチャック・シラットを伝統的な形態で伝承・維持してきた人びとは、外国人ならだれにでも、無償や無料同然でプンチャック・シラットを教えてしまう場合があり、そのために伝承者たちが経済に困窮してきた。だからこそ、誰かに教えるのなら、インドネシア人には高額に見えても、正当と言えるような対価を支払ってもらうことを一般化していく必要がある」という言説も見られる。

今回、改めて調査対象になってもらえないか、伺いを立てることにした。結果からいえば、以前、釘を刺してきた中枢人物と、文化資源になりゆくプンチャック・シラットの行く末について、私見を述べたところ、「調査するなら好きにしていい」ということで、許可を得ることができた。2017 年 8 月 18-20 日には、タントゥンガンが主催する 2 年に 1 度の大規模なプンチャック・シラット・フェスティバルが開催される。申請者は、フェスティバル運営の一員になることで、参与観察の機会を確保する。同時に、タントゥンガンやプンチャック・シラットを取り巻く社会的なネットワークについて、調査する予定である。

【タントゥンガンの概要について】

タントゥンガンは、写真を趣味とし、伝統的なプンチャック・シラットに参与してきた数人のインドネシア人が、「振興」（*promosi*）と「保全」（*pelestarian*）、「出版」（*publikasi*）

を鍵概念に、2010 年にジャカルタで設立した集団である。2012 年にタントゥンガンは中部ジャワのジョグジャカルタに拠点を移した。彼らは、独自に伝統流派の継承者にインタビューをして、伝承を記録することと、ウェブサイトを運営して、写真や動画といった電子メディアを通じて、「かっこいいプンチャック・シラット像」を提示し、若者の注目を集めることの 2 つを柱に活動を続けてきた。社会的なネットワークを活用し、プンチャック・シラットの伝承や技術をテーマとするセミナー・ワークショップにアマチュア写真家や講師を招聘する。演舞とパレードのフェスティバル（2012 年より 1～2 年に 1 度開催）では、実践者 1 万人を動員する。

彼らは、ワークショップで高額の参加費（約 2000～5000 円。ジョグジャカルタの最低月収は 10000 円）を請求する。これは、営利目的ではなく、実践者に自らの技術の経済的価値を認識させるためだという。タントゥンガンの中心人物の 1 人は、フェスティバルの赤字補填のために、自宅や自家用車を売却したことがある。4 人しかいない中心メンバーは、プンチャック・シラットの実践者ではあるが、資産家ではなく、教職や自営業で生計を支えている。彼らの活動は、趣味とみなすには過剰なコミットメントによって成立している。

②インドネシア国立ガジャ・マダ大学

ジョグジャカルタでは、学部・修士課程（2008 年 9 月-2009 年 8 月、 2012 年 9 月-2014 年 3 月）のときに留学していたガジャ・マダ大学文化学部を訪ねた。同大学の日本文学部には、以前所属していた大学にインドネシア語講師として来日していた教員が数多くいるからである。同大学の所属教員との関係を再構築することができた。

また、修士課程の際に出張者が所属していた大学院文化学部人類学科を訪問した。そこでは、当時お世話になった 3 人の教員に面会し、今後、調査 VISA など取得する際に受け入れ教員が必要になった場合、カウンターパートの役割を担当してくださることになった。今、申請者とガジャ・マダ大学の間には個人的な人間関係しかないため、こうした活動が今後の研究にどれだけ意味をもたらすかは不明である。しかしながら、本事業を通じて、交流を再開できそうである。

③実践者

今回の滞在中、プンチャック・シラットの教えを、ジャワの人生哲学や処世訓と同列にとらえ、生きるうえでの精神的な糧とする市井の実践者にも面会した。申請者は、2012 年から交流のあるハルヤント氏（仮名）のもとを訪ねた。2012 年、ハルヤント氏が築き上げた技の体系を、ハルヤント氏の友人の息子で、才能のある男子中学生に伝授しようとしていた。申請者は、その際に、投げ技や絞め技の実験台となることで、ハルヤント氏との個人的な関係を形成しようとつとめた。当時、ハルヤント氏は、シラットに関する申請者の質問については能弁だった。しかし、申請者はハルヤント氏と疑似的にシラットの師弟としての関係を結んだ恰好になっていたためか、プライベートなことへの質問はうまく回避されてしまっ

ていた。今回の面会では、師弟的な関係性を強調しないようにし、ハルヤント氏の半生について聞き取りを実施した。特定の流派に縛られることなく、あくまでも護身術の探究者として活動する人物について参考までに詳細を知りたい、と考えていたからである。

ハルヤント氏は 60 歳代後半で、ジョグジャカルタにある王宮の役人の家系であった。幼少のころからほうぼうでシラットを学び、20 歳前後のころには、ジョグジャカルタの王宮広場で、ヤクザ者と一緒に喧嘩に明け暮れていたという。呪術的な力を秘めた道具によって、刀傷を負わないような相手に対して、素手で対抗する術を求めて、中国武術に由来するプンチャック・シラットやヨガの技などを組み合わせ、試行錯誤をしていたという。

ハルヤント氏は、ガジャ・マダ大学法学部・大学院法学研究科を修了し、法曹を生業としていた。学生時代は、演劇に傾倒し、40 歳代のころに妻がドイツ留学したのをきっかけに、ハルヤント氏はドイツの大学院で演劇学の博士号を取得したという。ガジャ・マダ大学の学生演劇部の指導役をつとめ、護身術の修行で培ってきた身体づくりの技法を「オラー・トゥブー」（olah tubuh、直訳すると身体加工）と名付け、学生劇団員やパフォーマーに教授してきた。ハルヤント氏は、あるときから、「人体の構造を破壊するための護身術」ということをテーマにして、自らの学んできた技を体系づけようとしはじめていた。試行錯誤の最中、弟子のひとりに、動画投稿サイトにアップロードされているロシアの軍隊格闘技システマと、オラー・トゥブーが酷似していることを教えてもらったという。そして、2015 年頃には、ハルヤント氏は、ジョグジャカルタのシステマ道場でインストラクターを務めることとなった。ハルヤント氏がいうには、システマ関係者によると、ハルヤント氏のようにほんの数か月でシステマを習得し、インストラクターになることは不可能だという。ハルヤント氏がいうには、ハルヤント氏が追い求めた理想的な護身術が、原理にしても、練習方法にしても、システマと酷似していたからだという。

ハルヤント氏は、申請者が帰国したあと、約 10 日後に心不全で亡くなられた。プンチャック・シラット関係者が亡くなると、ソーシャルネットワーキングサービスの Facebook 上では、その界隈のひとびとがお悔やみの言葉の述べることが多い。申請者は、タントゥンガン関係者が述べた Facebook 上のお悔やみのことばによって、ハルヤント氏がタントゥンガンと深い関係にあったことを知った。

ハルヤント氏は、自らの活動を「生きることがシラットであり、シラットをすることが生きることである」（Silat itu hidup, hidup it silat）と称することがしばしばあった。申請者の理解するところでは、次のような意味合いである：左右によけたり、引き寄せて相手を動けなくしたり、生殺与奪の選択を迫ったり、といったことは、ことばによるコミュニケーションの戦略に引き寄せて考えることも可能である；人生の苦難や喜びに際しても、シラットで繰り返し学ぶ動作や対処の仕方を、象徴的に応用することができる。こうしたとらえ方は、所属流派の拡張といった事情にかかずらわないシラット実践者にしばしば見られる。申請者は、ハルヤント氏との対話を通じて、必ずしも、流派や団体に所属せずとも、また、実際の格闘を伴わなくとも、生活を営むことによって、プンチャック・シラットを実践すること

が可能であることを知った。また、プンチャック・シラットで学ぶ暴力への対処法を象徴的に理解することによって、実生活での困難や諍いに対処するための指針としている人びとがいることを知った。

プンチャック・シラットを単に護身のための動作に還元してとらえたり、社会集団との関係や文化資源化の文脈でのみとらえたりしようとすると、ハルヤント氏のような実践者の声はこぼれおちていってしまう。また、申請者の研究対象とするタントゥンガンも、種類はちがえど、一筋縄ではとらえられないプンチャック・シラット観を有しているように見える。申請者は、プンチャック・シラットについて把握しようとするなら、その実態だけでなく、概念上の議論についても検証する必要があると思われる。このような議論は、プンチャック・シラットと同様に、国民文化化や地方文化化の道をたどり、グローバル状況への対処を迫られている、種々の客体化された文化についても適応可能と思われる。今後は、文化の継承、という側面に焦点を当てることによって、ハルヤント氏のような思考の仕方も参照点に含み、インドネシアにおけるグローバル状況と伝統文化継承の現代的位相の描写に取り組みたい。

④ 偶然の出会い

今回の滞在中、2009 年より付き合いのあるインドネシア人の友人から紹介を受け、カルチュラル・スタディーズを専門とし、太平洋戦争中のカトリック教会の動向について研究する大学教授に面会する機会を得た。その方によると日本軍政期インドネシア（1942-45 年）では、啓民文化指導所という公的機関が設置され、インドネシアで活動する民間組織のリストアップを進めていたという。啓民文化指導所がインドネシア人若手作家を集めて、文章指導をしていた時期もあるとされる。シラット協会が設立されたのは 1948 年で、独立戦争の真っ最中であった。シラット協会によれば、プンチャック・シラットの用語を形成したのも、この時期であったという。日本軍政の施策がインドネシアの護身術実践者らを刺激した可能性もあるため、今後、日本軍政期のプンチャック・シラットの動向についても、調査・研究を進めていきたい。

●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施によって、予備調査を実施し、調査対象団体の調査許可を得るとともに、カウンターパート候補とのコミュニケーションを取り始めることができた。また、以下の 2 つの論点を得ることができた。今後は、博士論文の執筆を目的に、下記の 2 点について研究を進め、論文ないし研究発表を実施し、研究を進展させていきたい。

①インドネシアの国民文化形成期におけるプンチャック・シラットの状況は、シラット協会が提示してきた一般化しつつある言説とは異なるものが含まれる可能性がある。また、当時のシラット実践者らの行動には、日本軍政期の文化政策の関与も見られる可能性がある。

②調査対象団体であるタントゥンガンは、草の根でグローバリゼーションがもたらす状況を乗り越え、また活用しようとしているように見える。タントゥンガンを取り巻く状況や言説を、聞き取りや参与観察によって収集・整理することによって、文化人類学におけるグローバリゼーションに関する議論に接続できる可能性がある。

●本事業について

本事業に参加し、旅費支給を拝受したことで、申請者は、研究の方向性を修正するとともに、当初想定していたよりも、本研究における社会的意義がより大きなものであることを確認することができた。また、今後の研究上の重要なインフォーマントや、カウンターパートとの関係を深めることができた。それはひとえに、学生派遣事業の規定枠内に収まる範囲で、複雑な渡航経路を設定することができたからであった。学生派遣事業は、申請者のような競争的な研究資金の調達に不慣れな学生にとって、重要な予行演習の契機である。年複数回の応募〆切があることも、学生の背中を押してくれるものだと感じた。本事業を通じて、海外渡航を伴う研究活動を再開できたことで、申請者は自信を取り戻すことができた。感謝申し上げたい。

申請者のように、博士課程での学生生活のいろはを知らずに進学した学生にとって、本事業は研究生活との架け橋である。申請者は、これからも、本事業や、これに類する事業が継続して実施されることを希望する。